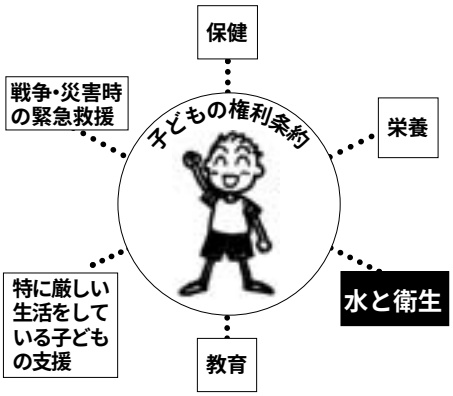
シリーズ Series

基礎講座 UNICEF

病気の80%は汚れた水が原因だといわれ、下痢が止まらず脱水症になり毎年220万人の子どもの命が失われています。
今回は、井戸作りを通して、人びとが自分たちの力で生活を改善していけるようにする支援について、ご紹介したいと思います。



第3回▶水と衛生

井戸ができた！

インドのある村で

じりじりと焼きつくような暑さが続きます。ただすわっているだけでも汗がしたたり落ちてきます。こんな暑さの中を、ランジャンは母親のリーマとともに、1キロ離れた水場まで水をくみに行きます。6人家族を養うのに必要な水の量が1日平均192リットル、この水を運ぶのに、水場まで足を運ぶ回数およそ9回、そのため4〜5時間を費やしていました。1日の終わりにはもう精も根もつき果てて、何もしたくなくなってしまいます。
「もう少し近くに水くみ場があったらねぇ。」

＊

ある日、村の女性たちは村長に相談しました。村長も村の女性や子どもたちの水くみの苦労のことを考えていたところでした。
「じつは私もなんとかしなくちゃと思って、となりの村へ見に行ってきたんだ。井戸の資材は政府が提供してくれるが、修理や管理は村のみんなでやっているそうだ。うちの村ではみんな協力してくれるかなぁ。」
「もちろん、私たちだって。」
こうして村に井戸ができることになりました。村の男性たちも、井戸の資材を運んだり、水場のコンクリート打ちをしたりと労力を提供します。

＊

ユニセフは地質調査をしたり、大きな掘削機で作業の支援をしたり、丈夫さと手入れの簡単さを第一に考えた手押しポンプを調達したりして手助けをします。また、村の女性たちを中心に井戸を管理するグループを組織し、修理や管理の方法の研修も行います。村のみんながちょっとずつ井戸利用料を出し合って（貧しい人も払える金額で）井戸がいつも清潔で長持ちするように井戸管理グループを支援するやり方などもアドバイスします。

＊

村のみんなが見守るなか、井戸が完成しました。
「リーマ、さあ、やってみて。」
村人の声に応えてランジャンのおかあさんが取っ手を押します。1回、2回、3回……。いつのまにか、エイショ、エイショのかけ声がわき上がります。ランジャンは祈るように両手を合わせています。乾いたポンプの音が、水を含んだゴボッという音に変わりはじめ、にごった水がふき出ました。だんだん水が透き通ってきます。
「やった！」
みんなの歓声があがりました。
「さあ、順番だよ。あとの人でも水はなくなりはしないからね！」
リーマの誇らしげな声が響きました。

① カギは人びとの「参加」

井戸を作る際には、問題抽出→プランニング→実施→維持管理の過程で、地域の人びとが主人公となって「参加」することがとても重要です。井戸を作って「さあ、使ってください」ではなく、地域の人びとが自分たちの力で井戸を作るのをサポートする方が、

- 人びとが自分たちの力で生活改善の方法を身につけることができる
- 井戸作りの過程を通して人びとの衛生意識が培われていく
- 与えられた井戸ではなく「自分たちの井戸だ」ということで、井戸が大切に使われ長持ちする
- お金もあまりかからずにすむ
- 女性の参加により、女性の地位が向上する

といったように、地域社会全体の開発に役立つことになるからです。